

「産農人」とは農作物をつくるだけでなく、市場ニーズを理解し流通させることのできるマーケットセンスを持った新しい農業人を表す造語。横須賀商工会議所と地域の農家・加工業者・飲食店・メーカーが一丸となって、将来の農業を担う有用な人材の育成に取り組んでいます

「若い力」で農業に新風呼び込め

農業人口の減少に高齢化、後継者不足も深刻だ。
日本の農業を取り巻く状況はかくも厳しい。
若者にとって一次産業を魅了的なものにしなければならない。
「産農人」はこの至上命題に挑んでいる



※このほかの新メンバーとして、河西愛蘭さん(2年)がいます

めざすは「稼げる農家」

新時代の農業人を育成する横須賀商工会議所の「産農人育成プロジェクト」は、5期目のメンバーを新たに迎えて2022年度の活動がスタートした。学習意欲旺盛な三浦初声高校都市農業科の生徒14人の指導役を務めるのは、地域の若手農家、飲食店経営者、大手食品メーカー社員、料理研究家と多彩な顔ぶれ。学校の授業とは異なる視点で実践重視の学びを提供する。

「産農人」新メンバーの入講式が4月14日に開かれ、同商議所の平松廣司会頭が「農業を産業化していく夢とプライドを持つて挑戦して欲しい。皆さんの活躍を期待している」と激励した。

同商議所では、農業を横須賀の経済発展の核に位置付けている。そのため人材育成を重要視しており、経済人の視点で学びを仕組む。若者に求められる「経営的センス」を身に付けてもらう狙いだ。農業技術の習得は前提条件であり、消費者ニーズの理解、需要予測、収穫品の付加価値化など、幅広い知識の習得が欠かせないと考えている。

今期から神奈川県横須賀三浦地域政総合センターも「産農人」の取り

「産農人」新メンバーを組みを強力にサポートしていく。同センターの井上和子所長は、三浦半島の農業従事者の減少と高齢化に危機感を持っており、「ここ5年間で横須賀は55戸、4市1町では約150戸が農業から離れている」と報告。対策のひとつに、農業政策として若い世代の参入を促し、担い手の育成に注力していく方針を伝えた。

5期生を代表して挨拶した塚本陽花里さんは、「将来は農業に携わりた」と考えている。そのため準備とともに、多くの人たちと係わることと人見知りの性格も克服したい」と意気込みを話した。14人のメンバーは、畑で行う実習と加工品の開発、販売戦略などを組み合わせたカリキュラムに取り組んでいく。

《5期生新メンバー》

大河内 夕奈さん(2年)

農作物を育てる過程とともに、市場ニーズや消費者が必要としているかに興味がある。学びを深めて、自分の考えをしっかりと伝えるようにしたい。

熊井 菜々美さん(2年)

自分たちで作った野菜を、自分たちの手で加工していく過程に関心がある。「6次産業化」の知識を増やすとともに、メリットやデメリットも学びたい。

高澤 望楽さん(2年)

食品加工や販売に興味がある。「食品ロス」にも課題意識を持っており、それにつながる加工技術などを学びたい。将来の仕事もそうした分野をイメージしている。

田中 里桜さん(2年)

現場をよく知る生産者の方たちから沢山の学びを得たい。人見知りの性格を克服できるよう、積極的に多くの人と関わりを持って自主的な行動を心がける。

塚本 陽花里さん(2年)

農業に携わる仕事を志望しており、学校の授業では学べない農業技術を学びたい。食品廃棄の問題にも興味があり、これを解消する未来をつくりたい。

長澤 卓哉さん(2年)

野菜などを活用した商品開発に興味があり、生産一加工の工程を体験したい。将来は自分の会社を立ち上げて経営に携わりたい。